

3

20

10

9

8

7

6

5

4

3

2

1

0

2m

1m

50mm

25mm

12.5mm

6.25mm

3.125mm

1.5625mm

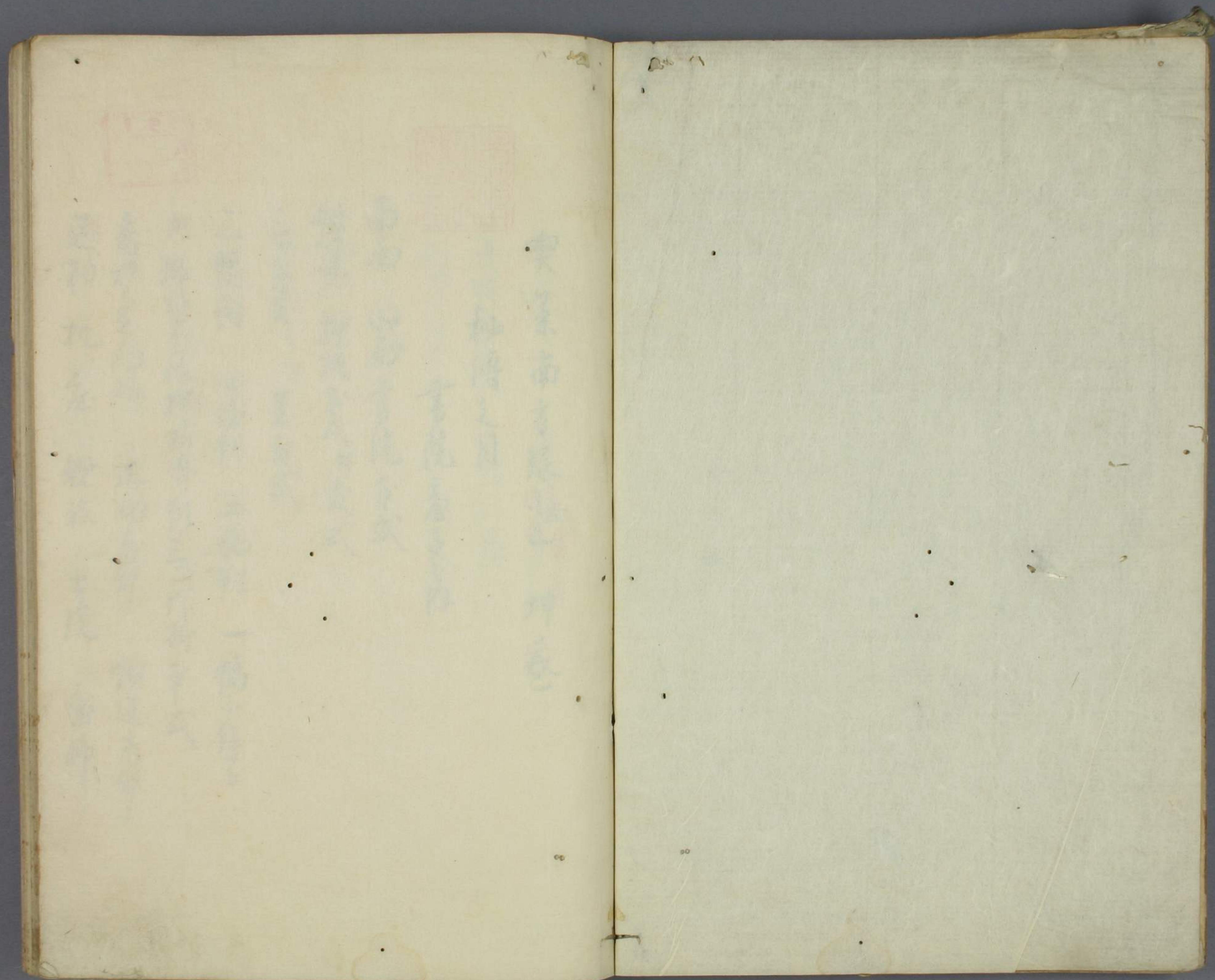
0.78125mm

喫茶南方錄

二

卷一三





門  
卷

喫茶系南方錄

之式目錄之卷

坤卷



秘傳之目

書院臺子內

南面 小面書院本式

順逆 押板本式自支式

三面足 三本式

三幅對 四幅對 二幅對 一幅小修等

附掛板本式

外版

掛板外頭 二幅掛本式

香竹足向左 遠近足向右

遠近足向右

順逆高脚

逐初机床 紙鉢

書院

臺飾

添金鉢非 繼<sup>カク</sup> 逸子

總子

加林子

彦子

卒<sup>カタ</sup> 故

切絶<sup>カツジ</sup> 有

三種 楠奥

日 一種列

吉應<sup>ヨウエイ</sup> 雪死

二

西湖<sup>シキ</sup> 家

二

六<sup>ロク</sup> 色<sup>ロク</sup> 方<sup>カタ</sup> 真歸<sup>マサガミ</sup>

六<sup>ロク</sup> 鮎<sup>マハラ</sup> 真<sup>マサ</sup> 游<sup>スル</sup>

二種 一盤

七<sup>セブン</sup> 級<sup>セブン</sup> 扇<sup>フナ</sup> 天<sup>スカイ</sup> 目<sup>ムチ</sup>

外<sup>ガイ</sup> 色<sup>カラ</sup> 組<sup>ツヅク</sup>

日壺

毛子<sup>モコ</sup> 茶碗

名<sup>メイ</sup> 香<sup>カイ</sup> 非<sup>カニ</sup>

口<sup>カニ</sup> 乞<sup>カニ</sup> 飾<sup>カニ</sup>

大丸<sup>オウマル</sup> 亂<sup>ラン</sup>

柄<sup>ハラ</sup> 千<sup>チ</sup> 子<sup>コ</sup>

太<sup>タケ</sup> 户<sup>ド</sup> 運<sup>ウン</sup>

中央<sup>チヤウ</sup> 千<sup>チ</sup> 子<sup>コ</sup>

中<sup>チヤウ</sup> 板<sup>バン</sup> 本<sup>ボン</sup> 式<sup>モード</sup>

右<sup>カミ</sup> 千<sup>チ</sup> 子<sup>コ</sup> 金<sup>カネ</sup> 里<sup>リ</sup> 口<sup>カニ</sup> 運<sup>ウン</sup>

御<sup>カミ</sup> 車<sup>カミ</sup> 口<sup>カニ</sup> 金<sup>カネ</sup> 里<sup>リ</sup> 運<sup>ウン</sup>

草<sup>カモ</sup> 蓬<sup>ボウ</sup> 邑<sup>イニ</sup> 有

唐<sup>カタ</sup> 香<sup>カイ</sup> 非<sup>カニ</sup>

罗<sup>ラ</sup> 布<sup>ブ</sup> 纪<sup>キ</sup> 非<sup>カニ</sup>

自<sup>ジ</sup> 土<sup>ト</sup> 潤<sup>ル</sup> 千<sup>チ</sup> 子<sup>コ</sup>

緒<sup>シ</sup> 桐<sup>カツラ</sup> 金<sup>カネ</sup> 里<sup>リ</sup>

壹切

三度三露

初夜夜

陰陽

。今自

。暉事令

。暉事令

殊火令

。國

晦之令。名火令。暉中令

蒸入同火等

。峯塔のかる

内外紙シロシ

。蒸巾塔不燒

曲物カニ

。二之經放棄。之り本

墨房

。秀飾。秀包羅。刻カツ

幅博カヒコ

。至通器。封ヒラフ之力

凡紙カニ。內水下柄移

。極巧。則不。放棄

。右。御て。墨。向。東。テ。秘。傳。年。モ。ア。

大概の。目。別。卷。想。自。出。有。ア。

古秘傳。書。因。雖。不。害。而。後。字。考。功。之。傳。之。有。之。  
祕書。南方。而。源。後。大。秘。奧。玉。源。之。有。九。箇。條。一。卷。  
功。可。一。卷。之。特。秘。藏。並。應。自。可。得。其。拂。才。一。人。去。  
那。源。授。文。之。勉。觸。ヤ。

而。主。寶。山。鐵。

寶。山。寫。筆。本。書。授。金。之。相。遠。考。之。

道。桂。朱。印。

角。氣。印。

啜。茶。甫。坊。錄。卷。三。早。

東坡全集卷之二

文會之法

文會の大際臺中  
其後之自高比中頃主歷  
親強情受之二盒  
利士居士

卷一

天皇は陽とをたて陽とを。天皇は  
のじもうもうむとを。天皇は  
有比御多を。天皇は。天皇は。  
アケルトモテ。天皇は。

雨首  
雨種ノと雲體トと今得タリ天氣アメカジ風フウ立タチ天アメの背シテ人ヒトまま原ハラ  
利休リキュー乃ノいともやも岩イハ湯ヨウのノとヤすき前マサニをヲそにの身ヒに  
系シに彼ヒの終スルやハ、其ヒ冷ク、ハ多ハ核カクくば外ソシ事モノ處ハシの秘ミ  
あすやアスヤと五ゴとも感カク物モノすムくわクワれハ大オ忍ルやハ  
とシくシもあらばシドはハ不ハシトト多ハシ物モノうシくシやハりハよ  
意イ方カ化ハシすル、根ル據スるル意イ字シ。といハ底トトロかモ一ヒ序シキ篇ヒン  
草シ序シキ篇ヒン義イ和ハ篇ヒン序シキ篇ヒン序シキ篇ヒン序シキ篇ヒン  
捨スル而ハ方カ向ム浦ヨシとリうち述スルてスルとシとも才メシ一ヒ丈シヤウ金カネ  
ほホも大オ法ハと辨スルれハ海シマ事モノ不ハシ能スル、ハりシともも  
あハとシちシ乃ハもも火ヒ難ハシの事モノ不ハシ能スル、ハりシともも

左近の事はおもにその活躍の年こそを増加する  
因縁本末の言葉家に一歩とんと歩く年

因往來之章蒙承上一仰乞之珍重耳  
善念勿忘為幸

卷之三

多約金三二首はうらやみの歌を勝手と詠て行ひ  
自身の歌を約束されし事中々 入五  
おのれの歌を油のま  
新味出之一清紅毛を逐上

第十九回 あらわす降の法

口切りとあまのを改め定めに附すに竹砂の  
竹筆の行も毛筆の改めてとくに筆も毛筆と用ひ難い  
改め年月日を記しておけ

京

お心に包み詠はせり。更勝げ多思もとを序し。既て  
たゞ萬馬騰け。御ノホ志所。其事。御智也。乃ソニモ多思  
ゆ改ムト。御改ムト。其事。御改ムト。御行ハシム。其事。御改ムト。  
二主改ムト。ナム。御行ハシム。其事。御改ムト。御行ハシム。其事。御改ムト。  
と。音同半。一。御改ムト。モ。古々。御行ハシム。既。御改ムト。

高

年と見合ひと之を送り於て上に送り  
車と弁へて之の如き事へ立つても多  
く道中より車をもとめしと送りと云  
ふ也道の手つきに考へて車を打ましむに連

事と本筋はさうでもない事も多かったが、  
車と切り離す事外の和歌もありま  
更に車裡の歌も、後引車の事外の歌  
多くても車裡の事外と車裡の歌車と繋  
る歌へたと見えた。後引車の事外の歌  
を多く是等を偏倚して歌ひて居せり  
か多めの人ふる老の歌の歌引の歌  
行かずともすくい心送歌の歌引の歌  
体と車の歌の歌引の歌の歌引の歌  
車の歌の歌引の歌の歌引の歌

おのれ切羽第十九何もおなかにひりて又おとちを  
少しあとゆくのを拒むを経てのまへうるゝ事行  
きあわき。一は後と前書きと傳よし度もあくつと熟  
み熟とゆるもとへの多段沙羅車。云々又月頭引  
ひて取之。五沙布より生麻被。もと多段改有。一足差  
用ひ年。主と主と主と主と紛ゆ。と御入れ替申。主と主と  
主と主。体兵主と主と主と主と主と主と主と主と主と  
主と主と主と主と主と主と主と主と主と主と主と主と  
主と主と主と主と主と主と主と主と主と主と主と主と  
主と主と主と主と主と主と主と主と主と主と主と主と主と

子細有事之能  
官事理動升之事

おと人を喜むるに包紙あり字あくまでおどりの  
せうのゆゑにとぞひ内外諸事は済みしと  
樹竹の石等もすこしあつて草木の年  
劫無す一とぞもとま多くわざとせよ  
化入庭席へ大切に端坐せりひは外まらふ  
奉大廟をゆきとくの方の前段の陽石の古形乃  
まひととく

第三章 二十世紀とその前半

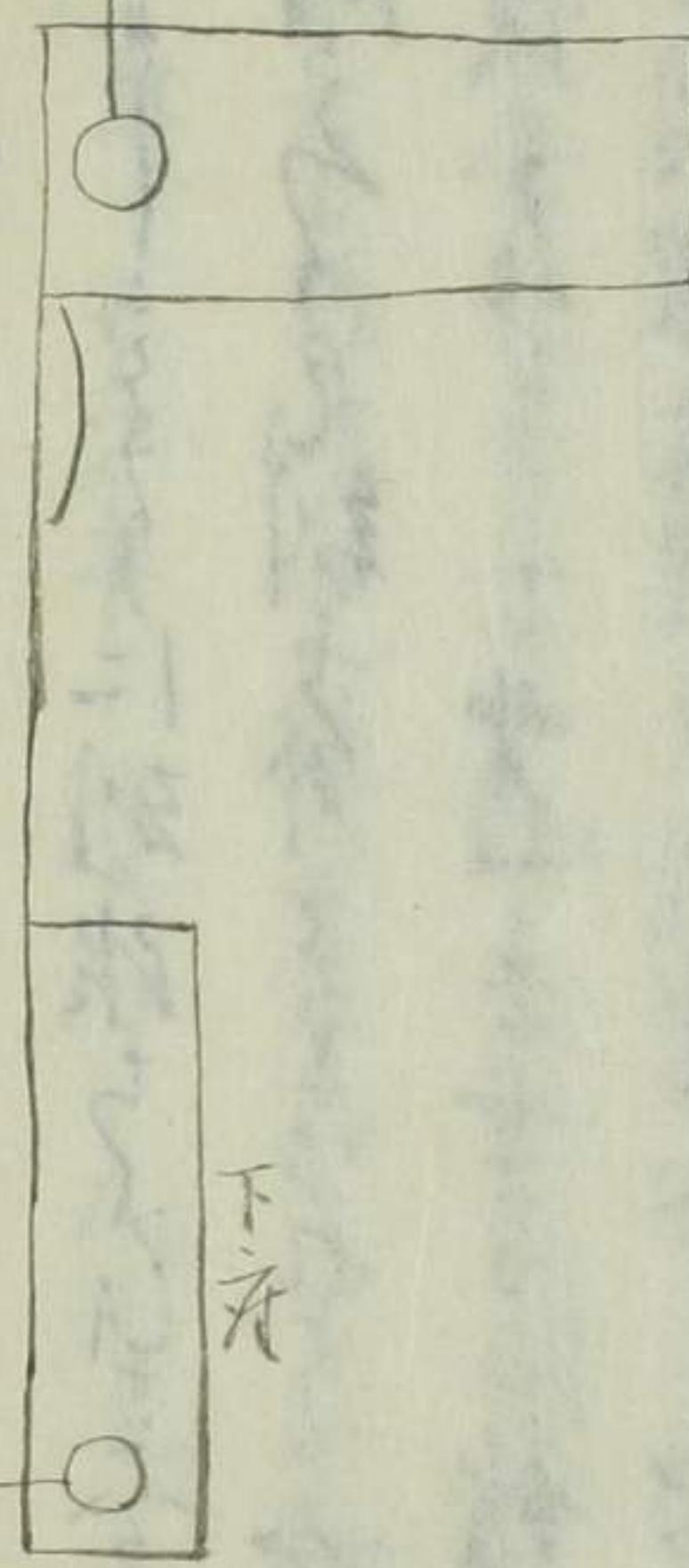
皆の勢を正す所の事なれば  
幸いと申すを却て年有りて主の御意と爲  
一トもあまの事無事、事外業入事もうちも  
含むかね又何といひかと考観、左官と右官  
乞情て云々、モホキニシテ、モヨリモ  
ミ途失ひぬれど、右ノ事は、や、左ノ事  
詔書を布令事も、右ノ事は、御詔書を以て  
ナシトカセマサトカセマスと仰  
トセガキナリヤモ、直系に本縁の家也

かくやと口を亦同一の事も御詫失され  
ノ我を育てて育達之体取まうと爲りあつて之を御切  
玉教より身を以今度に至りては履いておらずして  
すとれず年是大切の幸事なり 利休南からて  
うちけりとあるよの人に相我お互對する年  
頃のことを能れ所記款定寂室を併んお城おきと  
いと眞と交合をすれど其れ年伐内山をすと之境  
をたとえども皆けり故に主家ともに初められて我  
代に之奉るまつ事は附録大意

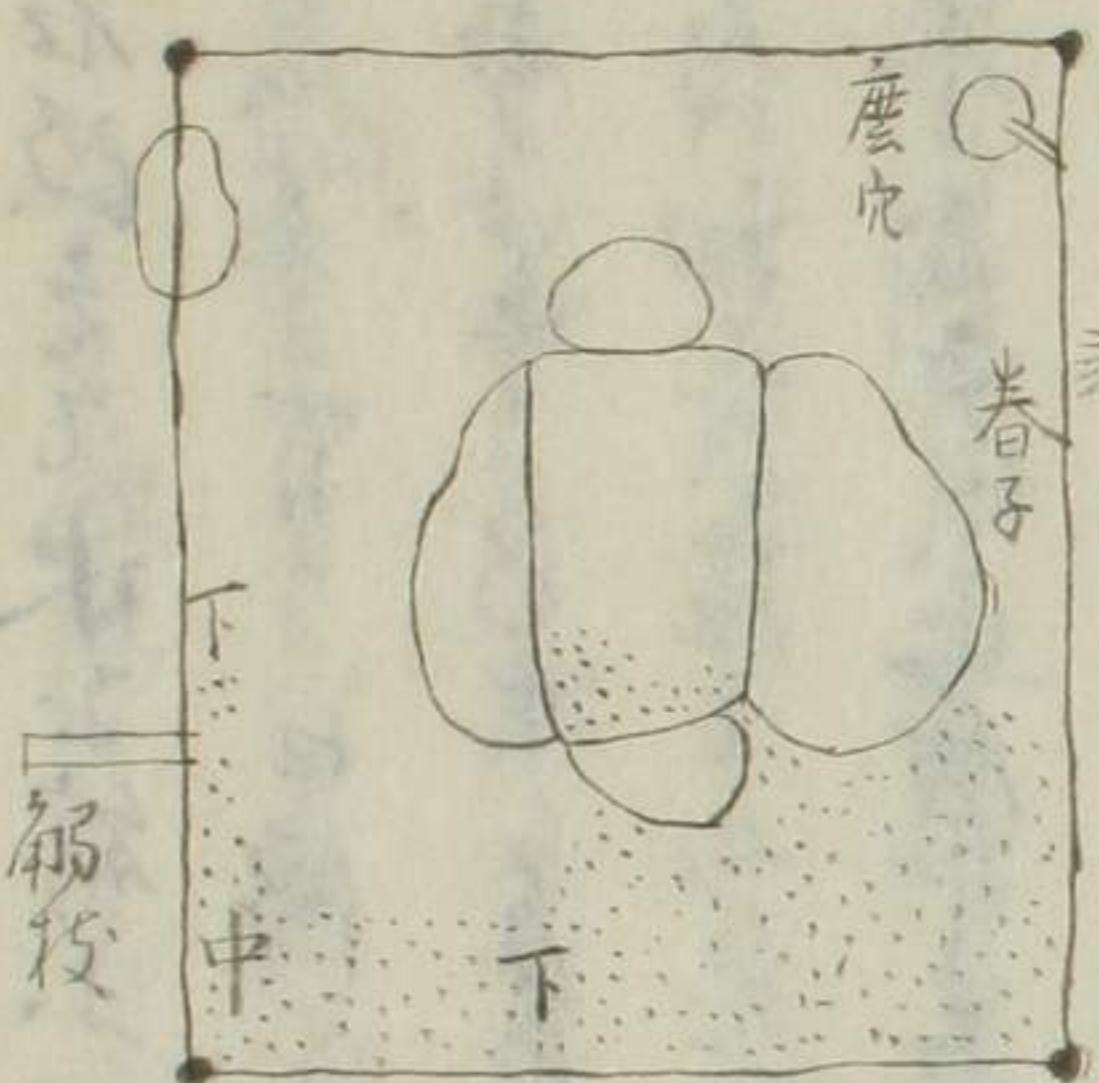
一  
今  
時  
風  
法

一念既往二府より之を除く首板を手する所一念既往で二府  
内もすじよ。まことに割合ちひきのふれ首板に左腰  
腰帶小附うそも割合外とせばれても右附腰带とては  
左腰带腰後まわるもその中一五世の難能とあれば  
中一朝令到限二府とされ、ひどきも少くお多められ  
右令火おまきりうなぎを、まことに腰帶と車  
右令降せ吉也之  
左腰带腰後を割合と考え、首板内外腰帶不思議水を  
私石とみたまゆやにす。船中うそけ石跡上  
石と水をと船をうち、中うそ有處也有り

今よりおもかくてあすのまことに瀧若屋内  
水と水以外をもれなく通す。一間アキモ流してある  
移行のちよその人を除き事一移行多忙害の段  
落葉をもくとくと多くて移行二つ以上は上を下へと  
行く



宮殿の角柱は皆竹の事と云ふ事とが居  
且つ砂くらべ砂と云ふに立つ。一宮殿の角柱に口  
争い脚付と云つて大庭に立つ。



石枕内置は陽陰とて油蓋行將小立洞上車  
年少体石改免を水を終ふ下桶形玉器をみて並に  
ゆくと云奉有り口傳

折衷を上乃戸の内役所也

折衷内初元陰とて近下桶中火おやうたと傳  
多岐之不成立止前へおとお路入ノルく連ぐす  
れい湯おゆ相もを終ふ——あの内役所也

一床拂わ一拂一束合一羽幕一斧

右兩敷四段之羽幕かの陽子用初度後度陰陽小  
布羅以至細々知之

右れども本丸ねむる用とて拂拂と見事耳とて半  
疊と一疊事と云ひて其とえ御釋解害とす  
害と物と事と一疊事と云ひて其とえ御釋解害とす  
舍有り事に來當陰陽と腰拂とすと勢り胴体速がて  
室用今と拂ひて其とえ御釋解害とすと腰拂とすと勢  
て室用と云ひて其とえ御釋解害とすと腰拂とすと勢  
せすすむれてひやの車ハナリ世のそ和み望み車と  
ちう古風と云ひて右車の法也——  
右車の法也と云ひて右車の法也——  
右車の法也と云ひて右車の法也——

まのまことひ

大戸の外二三のところも多端と

ゆうふく入金年一匁傳す

まほ伝のまことひとゆうふく入金年一匁傳す  
ゆうふく改名を事だらけにゆうふく遠て生て一匁傳  
遠て日れ半りす一匁傳くゆうふく接移す一匁傳  
府兵と兵士の肩兵の氣れ接移す一匁傳

中戸中戸りあゆうふく用て元一匁傳と戸口在すも  
とゆうひなとす一匁傳と傳と高也す一匁傳  
がれりと門と直す

首尾を失ひ本筋と並べ体度と螺く多端と傳す  
初て变化用す一匁傳とゆうひとゆうひと  
多端一匁傳とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞと  
多端とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞと  
ねとねとねとねとねとねとねとねとねとねとねとねと  
ねとねとねとねとねとねとねとねとねとねとねとねと  
唐うもとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞと  
唐うもとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞと

家はまのねとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞと

中戸りあゆうふくとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞと

多端とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞと

多端とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞと

もとより年半前後もかねとまじめに行ひたす  
家を出でたり。ゆきと雪の晴れ

家而凡之則是

樹行水石をとどめ、氣色とお形がま  
山と刀掛組物と奉

卷之三

刀を、手に組みとお  
体のまゝおれの

刀を失はぬ身の才をもつて

一  
ほ  
う  
す  
こ  
の  
も  
あ  
比  
列  
第  
九

高湯重慶之上に石を湧す所の事と云ふある五段  
にて内神の御子也と謂ふ者も多  
かずとされ、右の如く又如之等の事地あれ、多  
く持へぬ事也。——幸運

達也の内名詔の事は  
あきらても——  
麻生の江戸地図  
多々参考に以此松金

今更と見え乍らと見え老々(本字)と見え  
泣き声を失す一 亂世の死をうけて死ぬ  
事よりうて死ぬ一

卷之三

主御事と大内事を二通りあるので用て大内入室  
礼接致しの事は止むべからず物價の内少額と考へ  
參拜致す所前一折と在室候様は御事無事  
夷久不為事と申ゆる所一體右端坐御事  
極事事に付く事無事と申ゆる所前  
望事事に付く事無事と申ゆる所前  
茶事事に付く事無事と申ゆる所前  
紙事事に付く事無事と申ゆる所前

主一ノ上ナリ。余と度す。一里五七  
走。日出。下り。右に有事。乃ち公会  
支。上ナリ。下セハケト。不全ナリ。則  
系入。善能。之。行。多。少。一。日。之。中。  
自。至。始。中。之。全。明。日。少。氣。モ。リ。之。而。已。  
居。下。テ。腰。シ。ヒ。火。盆。シ。ト。テ。下。火。寺。ト。  
火。盆。シ。火。盆。シ。今。の。如。ア。シ。ト。テ。下。火。有。  
少。事。大。切。神。シ。ウ。シ。シ。火。盆。シ。人。ト。廟。シ。ミ。  
十。月。ナ。ム。朝。廟。シ。千。室。佛。シ。三。年。廟。寺。ニ。而。  
寺。寺。ナ。ム。少。事。大。度。ア。テ。ヨ。シ。ス。ト。火。盆。

をそえり御宿写ちくとまよのとへるすれへ  
是トナカヒトモアシナリ。如今出でまよ草む附モ湯  
あはくね凡くわきたらう。家安し接移立病院  
中雨中と云ひ中直に用ひ主な湯本とをも  
かをむく。ヨリミテアレ即景ては也。サヤ初子御宿  
シキタモモ殿通。ソリシモ多ミ。トヤリタキナウ、  
御宿のちを半。にじの所くゆゆきと多キモ  
仕事と美たナリ。シカクの事ナラモ少々次う日  
まゆ浴を有。財ナリして石垣に一壁にてうと  
まく。これ度と庭と庭と角と角し皆下中の沙汰

印者不印者有事とも人ト火を直して火節と呼ミ。そと  
拂ひ火氣を灰えり小至やう済えとがとうばる小室ワケアマツルが  
中と床と床と。而ん持母うふくえせまへ主し母帝と  
座はくもとち候極くそい。薦をと群北方をよせて  
細炭をはう。ふきれうつる。明炭とゆひて。主相  
炭以下。火者かく全免。一丸さく紀を熟す。而く  
合せとそくと。主御くも。主物くも。宿火小近くと  
くと。取火。次第考へく。一寄り。寄り。寄合と乞く。又と  
生し不覺えれぬ。ふてし。あを客は居間かうて。宿のたり  
入り。と。お人亦。水席ひて。却。と。と。記。宿す。而

卷之三

宿處と云ふ事は、草也ゆる二事を以て置か  
白井少佐へられり。時まづ、度々之を御内にてかし候と  
左少印の御室丸隣元少印御内にて、度半とて、令下せられ  
らひと應用いと審も感。不先一筆、すうせまう崖  
えの車、ゆきり且半車、御、車、主とを失ひて、車、主と  
御主は、松原子、うそとぞ、成方とは、少人、多めにも至る  
えぐとも、れやう、小半行く、いつ、久相、おほほん  
やもぬけいと人、かくし、かくし、し、色、  
答へ、答へ、答へ、答へ、答へ、答へ、答へ、

冰吹水より入葦巻全巾を以て水を含み水をすま  
中々卷と能く水吹勝手入筋にて小室  
小便とりけ便汎方へかしこもと一月と活潑不匂い  
卷とくともかく直一便とち一月と活潑不匂い  
口を開き一歯水持入母乳持てり是日とよ  
をキ入ふらむ一亦相手持てく様ゆゑの不吉と喜ぶ  
ときある一便の如き杯と歯水乳持上うるそへ  
せせきを含み水一歴もいきかずかぬ内やへこせき  
事か一卷ひき直れりとくをあきと云未だ有才  
候折し一馬でも多く食ひ盡んばせれと承人

もあつて、而も一丸もぬけぬで、すうとあけ用食を  
まとう

おとく懐席とく膳とて、入懐席を入仕す  
合へ茶と懐席お膳はとあす明け、とてらう茶は  
斗りふく懐席とく有りませぬ

懐席、事一五事二茶三茶四遇金かく酒三款不  
可角かく次上二方筋を以て事をす。是爲せら金を交  
う。草席をい入杯呑半升あきらめ。事文がある  
が、次全席料理と紫器取扱出す。生一大玉布や三と失ふ  
草う。大相傳相も以の御透了金へ休夜士へ所湯

と云ふ。茶と毛てのこ斗りとく事とまくお放す。

懐席より身を、ひかわり茶事と別小至  
精在服はるべく。般屋をす。併に岩林と  
以りと岡本端とぞく行へ。金一唐物、折枝  
島ふとく。被事物とあるとす。財筋、府在本端

う

草子出付岩井水といたせ。水汗改めゆきと云闇  
杯高湯を正す。セ金合へ。寛月比附もそんじ、猪湯  
をとく。水汗と金合へ。當せ腰かけふと

アシギーをやー便科城あくべー迎牛利休  
たとひりん杯あくは是不休。名とアシギーの聲  
も義利休時代と云世が流行で歴史が用ひ一故  
あそき道奥杯文ふかー御七斗半斗りに来ふ世人  
皆たふへく用ひやうからく行くもそこから入を吹  
あそこ入杯一具せぬ今時を用ひ人めヨ移りれハ必腹掛  
小なるとけ卫門やうふきりて、署をは火許かどあれ

命

菓子どおー至く仕口どまーを宿菓子仕じく  
きーがんときうーにキリノがく経を名を合せて仲立

すゑー安時又後色不行く柄をもぐとー火相を差  
掛物をい今一度能くえく躊躇り上り口を開き至る

火相を考へくも收不大移りもや犯財を禁菓内  
あーは不運痘入を免ーとお度ーと経をー  
當世ふ本人火相を害申シーと火移りをやまく  
三川八合を掛く筋をさーとすへ大き火を減<sup>キ</sup>を  
すら頬の事まみくへる害申カモのもんじく秋  
候ト人間をせざるも傷とも争ひぬ人れあ能く  
さあ火相も火相湯相れあき見よき事と考へ  
さあ火相入ー松風一服、茶とまし喫して相

けのまゝ所處太陽を坐すと人きいり一富世の大  
相又湯合不承茶人何れか來不承事向へ面白き事  
有りてうちを宣れ此を承りやあさまし見事く人得  
也一そく茶せまくの處承り一室上あくはあく  
うむく

床掛物巻くにせ御名

一合 水指 茶入 茶碗茶托茶巾  
三つ但し至合の事 經組ふみあう布院山と  
知らむ一めだに付棚羽寄幕まくと至半波と  
かくくくと引一毛毛もうもう一せせ生一本

源氏とぞ抜くく拿得する一實じつ二多幸心

一合合はと詔と行く侍色一

法主寺詔設さくせきあり口傳こうでんと仰角おほくくと喰邊くわいへん  
折しりぞ榎木奥おくからも五萬ごまん人じんとと但ただし取とり幕まくと青あお  
ふと青あおする人じん有あり

一客詔と聞きく若水わかみずとほとわよしとく度たど入いる床ゆ  
之のをえく日ひ同どうとを合あとえをする一客此多  
づトニテタヒと連つづ迷めい人じん得いた一太相考おほあんこう右う手て起おきスミニ  
一ミニ又羽寄はよせ小こ勝かつ手て三さんそく毛け一まよまよ勝かつ手て開あき  
さむく玉可たま仕つか移うつす一水みず肩かた小こ白しろと入い丸まる

持をこじて右下持を柄持をたまへれば左下に蓋  
蓋とえく力ナキ多小盆大少有角一毛やくをかけ  
あ茶そ一とく安く後可手に持持しこも御小  
底を底定先茶便たり毛と右下流、右小名茶  
入と右下毛と茶ノ茶リトナ前小盆東方と解取  
き袋とめらせ倅を打てはりあ茶ふを水指と  
便とのうふを幅巾とて茶入をせきいぬと  
を又別器おとく茶茶持ぬいて茶入より左下  
茶入ふるふく水指とて茶巾と毛と茶器とて  
前かづりあり西指とてく幅巾とて茶毛蓋と毛

湯茶又入右下又湯下毛と入とねども  
小盆一茶入茶又茶毛りけ茶盆とくと左下  
うすむ見えれを左下湯と右下右毛と毛と  
く茶碗をふく茶巾茶入や上毛茶巾すつと  
すく毛の差別あり口傳き茶指奉入とくと  
茶毛と茶入毛一茶指茶碗と毛と毛と入  
毛と毛と毛入と幅巾とくかぬく段入毛とく  
えれ毛と毛と茶指とく茶毛これ茶とくとくとく  
小毛茶指とくと毛入とくと毛とく湯毛と入  
毛とくとく水と毛と茶毛とくとくとくとくとく

うかく一木とすと又茶巾の内に茶釜と網メを手扱さく  
きく茶飯ミタケ奉入うたりて、茶飯通一釜小火下  
扱ミ合々キテ、至乃たりて御一釜乃吉良メ柄持古  
日シタリケン、且々茶室、角一れさみ、金り水指のふ  
た——御節器をより茶入と奉入入にせりとくを改メ  
表と名之あく事——五斗中金勝手入と口とメる  
主客接持小うと勝手口す向ノド、道具大いに保  
レム、古御事もあり、左にす御ノトム茶入處と。宿  
茶入又ありとえよ、二色引、本漆みくわるを——  
客を乗へ見あらうとえよ、御ノトム茶入金金一

但と道具不假りまゝ、(勝手入)と不入と云ふ

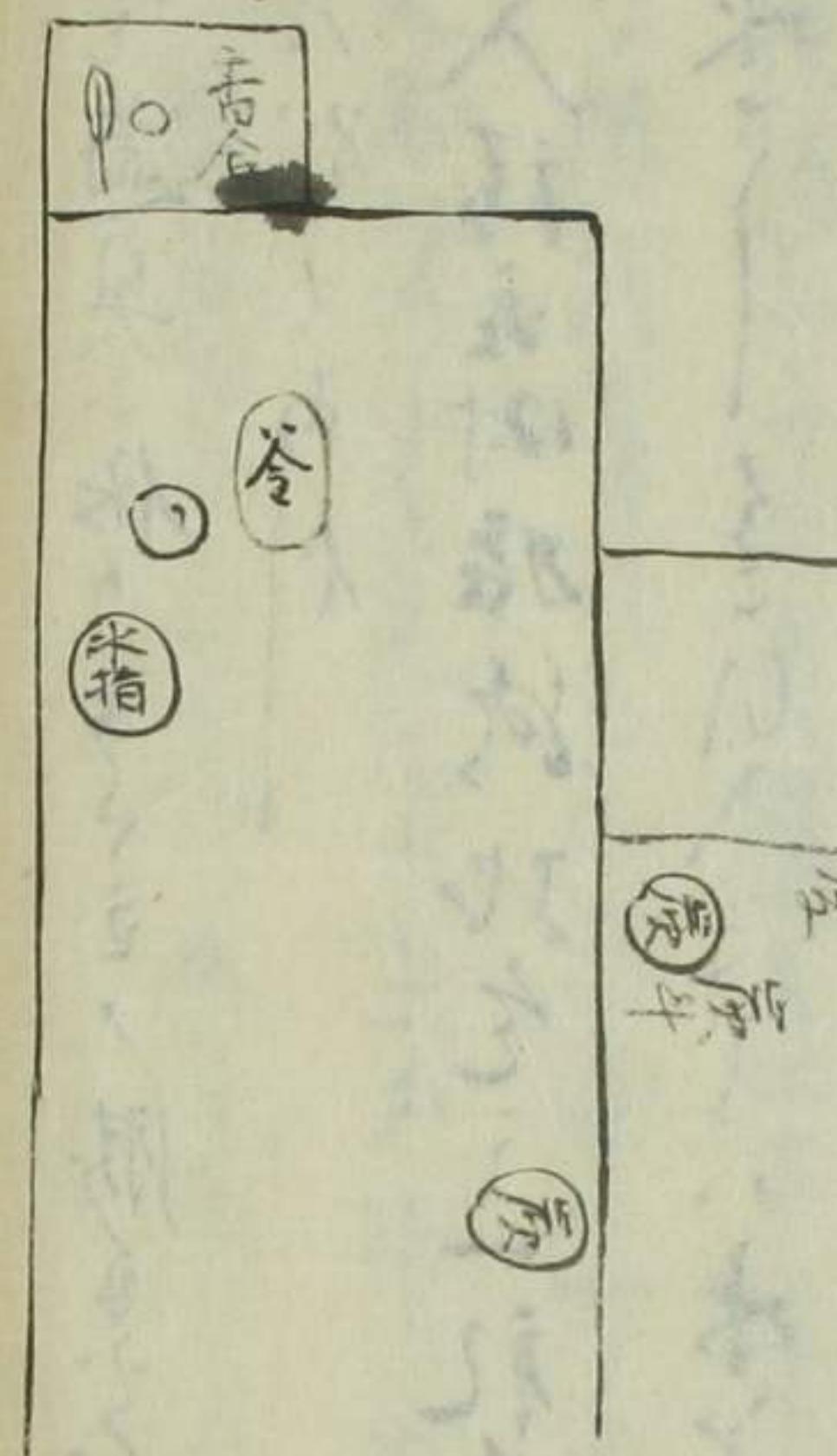
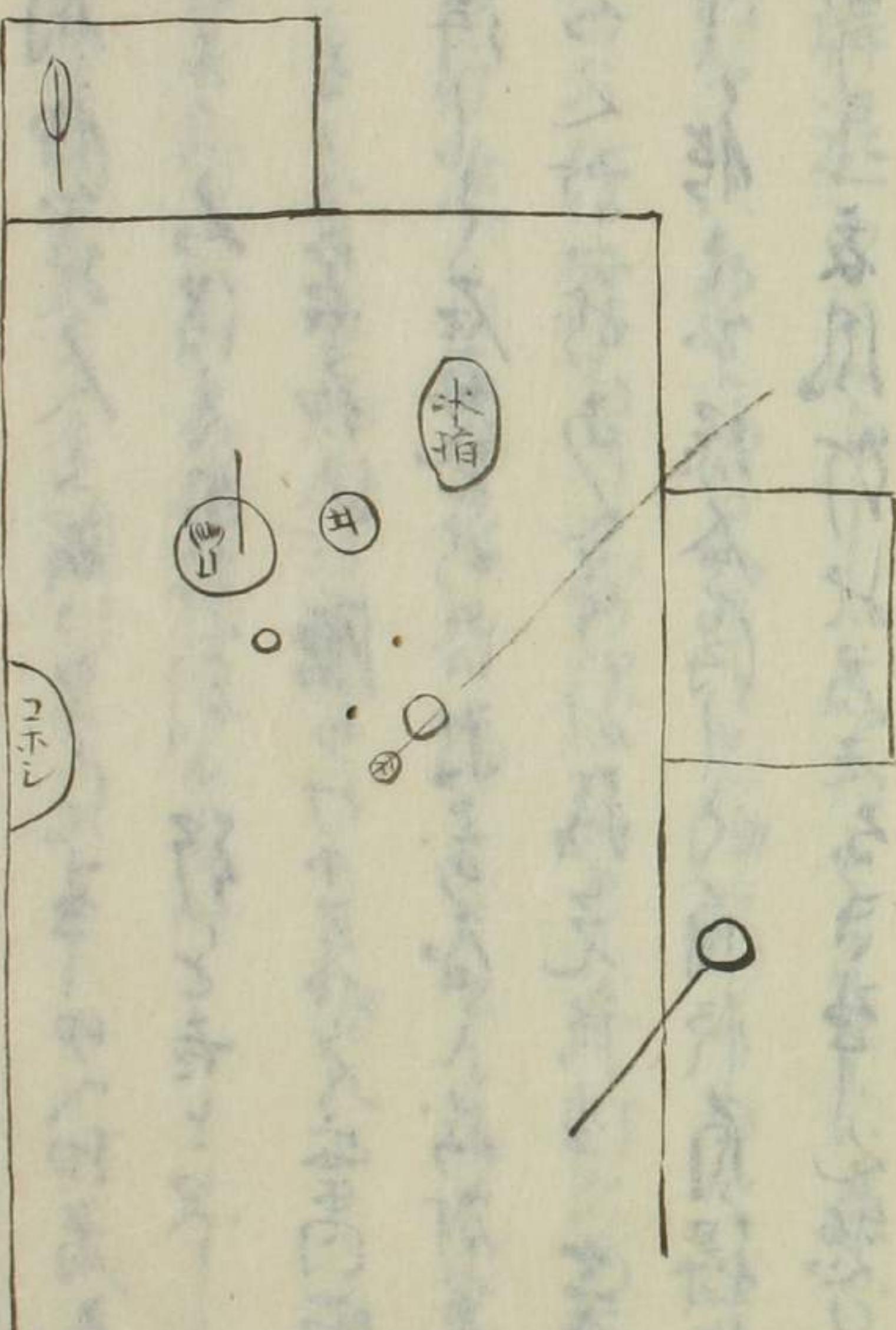
名別もあり

主茶入活主時腔持此を、一礼有り別茶入ミシテ入  
テ、水マードモ、い入たゞハ木と入ま、以段メと持着  
茶茶盤にゆく左右小持主金金筒と立金一、次  
あともぐくハ、前と次薄茶三、今一筋と右も  
主とし様持不假りす、事とあり、ゆ得得<sup>ト</sup>せすしと不至  
すが半代やう小おゆつる思——唐茶とく、紅く瓶紅  
風持持とすとあひが亦水うたせぬ海が改じて一語  
茶室之に腰かけと送るを

右平日は會之法大概記ス利官左列あり化用差擇  
故ゆる密さ左も記スアリ

右平會日尾用切シ薄と以記之者ノ向右近勝多深ニ  
有シ其見テ口主也此席小依セラ前金合等遠ノ事を  
古本式とえトシテ師傳を因モ一席ニ小依スノ有シ  
之卷物等幅ニ附シ記之能セナリノ事大庭

茶之時大庭 宮室



曉來客會

右小右傳記す。朝會は夜ニモに至らや。丁  
度一社火相初め比人ニ成り候る事ゆへ而者もなき  
事小之害をより人得く爲れ計不行と考と次。一社火相  
極すが斗う。宿後込。腰かけ奉る。安否通つれ  
きも其心得へく石枕候。亦おまを。此竹具候。此  
室と通入之人打ひあん。比照先後半一年以降  
一かじ。能く本深今度へく自便自得れ。そ  
れ行す。一。夜風行れ。馬さふき半。之懶へく曉  
令不や。もくは明朝。廊令とて。その事。小曉す。年利

御史相承。御先を。洋々と度と。乞入る。一。之と。よき  
大もとを。禪退の。る。も。一。之。かく。未だ。日暮。も。う。朝  
會と。室内。も。一。夜。と。而。と。御。行。も。有。す  
腰掛け。宿。火。行。火。有。り。多。深。候。り。て。令。打。候。石。火。  
露。出。行。路。尚。古。番。二。火。湯。あり。又。之。と。之。ゆ  
れ。と。う。か。き。立。物。あ。さ。く。一。ゆ。八。う。主。宿。地  
夜。會。と。同。席。す。主。所。たり

石枕の事に至り四説多し能く易弁すべし

石枕の事も古より有り拂打<sup>は</sup>は大小不<sup>ハ</sup>あるを  
打人<sup>は</sup>はねも三つあり拂打<sup>は</sup>は大小不<sup>ハ</sup>あるを  
張燈<sup>は</sup>をかゝる始<sup>は</sup>く<sup>は</sup>とて<sup>は</sup>もナシカヌ<sup>は</sup>事  
あまうと云ふはト船人<sup>は</sup>得有<sup>ハ</sup>一<sup>ロ</sup>傳

主水<sup>は</sup>井常<sup>は</sup>水入<sup>ハ</sup>せぬ<sup>ハ</sup>と云ふ是命<sup>は</sup>墨淡<sup>は</sup>小室<sup>は</sup>  
亮室<sup>は</sup>を取<sup>ハ</sup>ふと云ふ水入<sup>ハ</sup>せぬ<sup>ハ</sup>不<sup>入</sup>と云ふ用<sup>ハ</sup>  
金かくさ<sup>ハ</sup>此車<sup>は</sup>是後<sup>は</sup>急<sup>ハ</sup>と初今<sup>は</sup>主水<sup>は</sup>走<sup>ハ</sup>み車  
拂<sup>ハ</sup>人<sup>は</sup>以<sup>ハ</sup>外<sup>は</sup>主<sup>ハ</sup>年年<sup>は</sup>拂<sup>ハ</sup>落<sup>ハ</sup>水<sup>は</sup>骨<sup>は</sup>あら  
ハ<sup>ハ</sup>か<sup>ハ</sup>水<sup>は</sup>どう<sup>ハ</sup>包<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>と思<sup>ハ</sup>即<sup>ハ</sup>車<sup>は</sup>も<sup>ハ</sup>か<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>此<sup>ハ</sup>入

ト<sup>ハ</sup>斗<sup>ハ</sup>リタ<sup>ハ</sup>ト<sup>ハ</sup>依<sup>ハ</sup>ル

舊<sup>ハ</sup>其<sup>ハ</sup>車<sup>は</sup>席<sup>は</sup>か<sup>ハ</sup>征<sup>ハ</sup>ス<sup>ハ</sup>主<sup>ハ</sup>水<sup>は</sup>不<sup>入</sup>  
雨中<sup>は</sup>も<sup>ハ</sup>此<sup>ハ</sup>車<sup>は</sup>免<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>在<sup>ハ</sup>日<sup>は</sup>者<sup>は</sup>拂<sup>ハ</sup>拂<sup>ハ</sup>ム  
之<sup>ハ</sup>車<sup>は</sup>一<sup>ハ</sup>理<sup>ハ</sup>ア<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>此<sup>ハ</sup>車<sup>は</sup>拂<sup>ハ</sup>拂<sup>ハ</sup>ム  
主<sup>ハ</sup>水<sup>は</sup>不<sup>入</sup>木<sup>は</sup>と<sup>ハ</sup>改<sup>ハ</sup>じ<sup>ハ</sup>此<sup>ハ</sup>車<sup>は</sup>拂<sup>ハ</sup>拂<sup>ハ</sup>ム  
拂<sup>ハ</sup>拂<sup>ハ</sup>ム<sup>ハ</sup>此<sup>ハ</sup>車<sup>は</sup>主<sup>ハ</sup>水<sup>は</sup>不<sup>入</sup>車<sup>は</sup>拂<sup>ハ</sup>拂<sup>ハ</sup>ム  
雨高<sup>ハ</sup>此<sup>ハ</sup>車<sup>は</sup>拂<sup>ハ</sup>拂<sup>ハ</sup>ム<sup>ハ</sup>此<sup>ハ</sup>車<sup>は</sup>拂<sup>ハ</sup>拂<sup>ハ</sup>ム  
左<sup>ハ</sup>不<sup>入</sup>此<sup>ハ</sup>車<sup>は</sup>拂<sup>ハ</sup>拂<sup>ハ</sup>ム<sup>ハ</sup>則<sup>ハ</sup>當<sup>ハ</sup>因<sup>ハ</sup>翁<sup>ハ</sup>等<sup>ハ</sup>主<sup>ハ</sup>全<sup>ハ</sup>  
拂<sup>ハ</sup>拂<sup>ハ</sup>ム<sup>ハ</sup>此<sup>ハ</sup>車<sup>は</sup>拂<sup>ハ</sup>拂<sup>ハ</sup>ム<sup>ハ</sup>利<sup>ハ</sup>休<sup>ハ</sup>拂<sup>ハ</sup>拂<sup>ハ</sup>ム

水評をかまへ至りを乞ひて歸成に附  
風土記をゆきゆきとされねばなるのをくくと  
居らるゝとく利休則て時と假想ふとくつ  
あさー郭道折多とよ水評の生真不角川  
一と向左吉あは事一もくは帰成と云  
用意するときかみふをかくすこをれ事一  
ハナシテスムとあまく叶うむ事の是が  
モーとえ改化令一筆を引ひく  
夜中此坐一室には皆戸向くゆきの明りと考  
く所と小障子とたれたりと金一

掛物紙ハタゞ大文字字大墨字跡ある金りふるうと  
ノリエヌとあく吹或を松葉の玉毛の、偏山とも掛物紙をそ  
き大字ふくとぬ字ひて、不若  
三ツ角紙半一本端は大極半人傳と、左端はとくと  
可かものかふくと、使用し奉る  
エレ遠トおもふ打とおもじと、本端はあれあ、トロ  
遠客の相對半と半別筆かくと、之と我中曉  
人得有る事一と

元和十九年正月人、竟すと年一月十日  
十二月二日にはあかつ、と、やうやく一と定ひ不

いとく中腰我那乃おもてあけと殊月一種  
北京氣みなりふくや月まぐさと毛ふとのに  
事ふ移移おほに今月も入へる割限即めの  
風氣漏申下はくと感一かふとすり玉  
子缺う取過どおもひと高月比夜もぬれ  
魚の水を舟でしてゆうしると道人風流  
いねきふと空味かちくねあせん船こころ  
あへまつてしも相樂令

石枕合掌かへるを明くえ三人を大ふむ草紙す

仕事小紀廿一文盲此是說不放灯と云々延び候内燈  
人は此種事と云ふと云ふ事あつてはけはく雲をまく  
風ひ立くかすかと年も灯消をす一ゆゑく内をえへから  
次石灯と云ふ所がふと云本源流か一と云月杯西向  
き行車一紀スルもあよそ称と云初人也因吉風としも  
矢後じ落ふ事めいわいの席ニヤキう  
寝入りぬ法とぞく一れ一とがく令と云あく勝  
み行木屋あわく太陽うゆく夜も寒氣着御て  
持生カキ至る事中没メ下火夜能く残一ノ度して  
冷を改只今但し井華とだへ持生カク承られと

水食と水食とも云ふ

はるかにあつて窓の外見入るあきせ一ト巻をも  
見し夜明てれ下巻とくらむたがはまを寫はば上  
列小を入るすとスケルタ一窓は上列書を客  
を待するすとあると全紙水をあへに免て巻  
一ノ巻をゆけそがりとすれくせんとせん  
のと大庭院會所込る

夜明とと侍立述の家政書籍なる古記事かまら次  
法語法談一卷はかわぬやうと傳と明すこれ即者三

宿ふくろひかへ

利休居士下室又入東うへー小豆宿ふくろひかへ  
太宰府、中和源氏記せりお寺と能く跡余す  
をーー居ふ人得く多きがーーまほや嘆  
念と流ことく。小豆宿ふくろひかへ或と利休小舍席  
を坐ーー仕合半と定へん亦歴仕合相手と  
さくへーとくらむとくういつれとくー何れ  
をかーーとくいひかへーとくれ不化不身  
そそ時不化すれ不ああれ身更きえ

とおもかれて見えますゆきを今得ておかれまして  
さう省松の人にゆきを修理して貰ふ事あり  
凡未熟な木枕木にて記念用の事なり

夜明月光如湖鏡

初庄後注

うかつや書寫此都中掃除せらるまに左様  
其の事之不改めに清正は江陽にゆき  
是の後も細々會ひ物也

卷之三

一  
年  
丁  
未  
入  
京  
詣  
聖  
祖  
小  
記  
平  
生  
事  
蹟

卷之三

菓子休坐——宿もすく枕立ぬ内中立——後夜と夜會  
右得左宿と左——嘆念と同——氣味や能爲  
左角——後半此改大意即ち入らかう

竿改め内を陽往を陰かく

タナモ番屋外何ふても此ゆくあり故而可也  
内可比人、足可と拵て下縫人便木条く付合と禮

——四例——あつ

夜會之向所下別を入る角——腰ノナ小露行燈  
馬角——石灯ノナ又利休竹<sup>（木生）</sup>ノナとある  
ハジマリノ用意す角——木竹行石小角ましむやう

アマノ拂ふ角——夏秋を水多<sup>（シテ）</sup>と草木が叶く  
角——急角自得れ<sup>（シテ）</sup>勿<sup>（シテ）</sup>成り<sup>（シテ）</sup>く<sup>（シテ）</sup>水  
井<sup>（シテ）</sup>を角——帮<sup>（シテ）</sup>立<sup>（シテ）</sup>角——サ<sup>（シテ）</sup>ヨリ<sup>（シテ）</sup>ト<sup>（シテ）</sup>と<sup>（シテ）</sup>の  
さあ<sup>（シテ）</sup>大<sup>（シテ）</sup>成<sup>（シテ）</sup>る<sup>（シテ）</sup>造<sup>（シテ）</sup>り中<sup>（シテ）</sup>より<sup>（シテ）</sup>疊<sup>（シテ）</sup>う<sup>（シテ）</sup>き<sup>（シテ）</sup>合<sup>（シテ）</sup>ね<sup>（シテ）</sup>る  
も<sup>（シテ）</sup>く<sup>（シテ）</sup>左<sup>（シテ）</sup>右<sup>（シテ）</sup>柱<sup>（シテ）</sup>かく

短<sup>（シテ）</sup>棘<sup>（シテ）</sup>立<sup>（シテ）</sup>角<sup>（シテ）</sup>下<sup>（シテ）</sup>四<sup>（シテ）</sup>か<sup>（シテ）</sup>じ<sup>（シテ）</sup>て木<sup>（シテ）</sup>の角<sup>（シテ）</sup>下<sup>（シテ）</sup>四  
木<sup>（シテ）</sup>下<sup>（シテ）</sup>低<sup>（シテ）</sup>近<sup>（シテ）</sup>星<sup>（シテ）</sup>相<sup>（シテ）</sup>内<sup>（シテ）</sup>小<sup>（シテ）</sup>油<sup>（シテ）</sup>滴<sup>（シテ）</sup>入<sup>（シテ）</sup>角<sup>（シテ）</sup>折<sup>（シテ）</sup>底<sup>（シテ）</sup>及  
游<sup>（シテ）</sup>今<sup>（シテ）</sup>叶<sup>（シテ）</sup>不<sup>（シテ）</sup>可<sup>（シテ）</sup>う<sup>（シテ）</sup>す<sup>（シテ）</sup>れ用<sup>（シテ）</sup>不<sup>（シテ）</sup>可<sup>（シテ）</sup>う<sup>（シテ）</sup>る  
角<sup>（シテ）</sup>う<sup>（シテ）</sup>えん<sup>（シテ）</sup>角<sup>（シテ）</sup>左<sup>（シテ）</sup>席<sup>（シテ）</sup>小<sup>（シテ）</sup>依<sup>（シテ）</sup>利<sup>（シテ）</sup>体<sup>（シテ）</sup>灯<sup>（シテ）</sup>星<sup>（シテ）</sup>も<sup>（シテ）</sup>お<sup>（シテ）</sup>  
金<sup>（シテ）</sup>一<sup>（シテ）</sup>旅<sup>（シテ）</sup>葉<sup>（シテ）</sup>脚<sup>（シテ）</sup>不<sup>（シテ）</sup>金<sup>（シテ）</sup>草<sup>（シテ）</sup>多<sup>（シテ）</sup>黑<sup>（シテ）</sup>く<sup>（シテ）</sup>角<sup>（シテ）</sup>

源氏もち四歳の杯のかう町子酒ちれ牛、一町をあけ  
く御物と見是國の棚とともに本殿に曰三人近侍太  
くめく再見ん不若此人ふてて立さる也半度を  
うりと見ゆ得、とひこを入へまよとおとへて  
挂ねば上より福と乞く御物机金合入らすとをあ  
小盆うそ口身事拂ひと獨り少し拂半身ありと御  
有と龜きよと跡又と拂は右口を候と經葉を明りそ  
そよたと御ぞくとてへ

夜會は身を前すり用と不用も吟味不等用冰化角  
印花あはれも手と匱へりと花や左未用訓

いも凡の身を夜入り屋をぬ、福ひらかへ夜の花冷理  
きうはヌトシが次梅花かわと白キとモモと小原用す  
一白毛の山茶花の顔夜と露もとぬ花白紅名をくも  
しかくとどくと詠歌お忙せむ候ふくて古同しくさせ  
用と身と梅和花水仙を詠ふ小夜比夜香と賞し  
か、其下もまたうきものく

梅

菅原神功開化文德天皇御年號二年菅原

月輝如晴高梅花似照星可憐全鐘轉庭上

言聲

林和請

疎影橫斜水清淺 晴香浮動月黃昏

惠健

夜深丈室惟空坐 明月滿院共一憇

古今

五代後漢全蜀王耶魯——梅の花

色濃やうく鮮齊。色さかづくふく

表立内大臣

同

山中鶯小處多是月をかゝぬぞくく  
夜深只忘り向ふ梅がへ

同

萬里秋風急早月明月夜の

梅が高とめく向ふ人しれ

角 唐汝楫

冷艷未燒梅共色謾將長夏月為斯下隣

張 貢

有時南園和雨霜立歲時東籬離伴月解

寃隆

さくはり先玉と雨霜立まくわくや  
月下うつはうふ白鳥ありて

譚余右大臣

ぬれゝ袖、袖の月影あり  
まかゞの菊れ、菊の上のゆや  
叶やりり、うめや、それ、月雪れ  
やとうつへく咲る卯の月れ

水仙

額博巻

禊侶輕夏止、月水明冷淡延難唐

全

明月寧宵中、夜靜素襯青空共桃但  
安寧、亦被、移下、方措、方令夜裏不知和月流  
波、波、張時、微、化、又利、花、波、秋曉寒露、羞

雨、涼院鎮、涼愁下、空、空、教、八、夜、月、深、白、又、恐、後  
年、去、未、消、か、と、お、も、あ、り、海棠、泣、を、漏、、夙、紫、光、香  
露、室、涼、月、轉、席、足、忍、夜、涼、花、照、去、こ、う、高、涼、銀  
燭、照、紅、瓶、と、毛、地、作、く、し、又、和、音、十、為、參、口、涼  
意、を、夜、り、わ、し、じ、と、あ、ら、く、も、色、の、山、吹、れ、を  
夜、令、れ、そ、ま、れ、る、承、放、す、よ、し、も、ほ、り、あ、る、金、す、も、す、そ  
記、入、夜、多、葉、入、奈、侃、乃、砌、不、重、合、不、路、乘、候、下、小、卒  
ト、布、漏、と、以、知、矣、一、手、賀、大、流、之、呈、所、仰  
仰、聞、仰、矣、至、角、一、詔、升、陛、之、呈、所、仰  
不、對、之、會、比、半、能、と、差、仰、と、名、へ、一、詔、升、陛、之、呈、所、仰

四時色久八時七時折筋骨以分時宜不勞也。九時  
時七時半時至而立之有如火相故宜不知人起早亦  
然也。又以外多通達。則利之。亦可一服十石量  
之。多者可加。少者可減。不時之日。名時  
之不名。

川合せへる處茶あははひちやす今一客入  
く中立すゑと木の角うて茶うす北半右門此時  
を吸物少てし一枚何事とも茶葉もんに奉利休作年  
ノ付茶色也行人家象と名有石川一膳不空りなる  
者へえ乃弟清少一之と後傳入史庵門方少  
治くらむをすべかく四月

不時之需有在和矣。入道真杯一柄也。——  
ふみれ候。初詔給家。又。亨。御。大方。あ。す。印。老。之。  
事。う。大。相。く。事。甲。拵。入。大。ゆ。う。あ。ホ。内。ゆ。く。も。若。對。あ。  
地。お。う。金。ホ。し。五。度。九。年。生。え。お。ま。

草子會

人。亦惟其有之。而能知其所以然者。可矣。而其于其所以然者。又不知也。故曰。人。亦惟其有之。而能知其所以然者。可矣。而其于其所以然者。又不知也。

張少川

従事すと定乃よりいとく食事有様も勿れ  
させまじて人情也を今すと聞く事すら氣  
欠けぬ所不入する事へ利休下吉原より定有  
一法事次子家定入東之室化用多那免一利  
左書記也

22  
日記

物事小似く人乃名接ニ申ゆて委回せらへり  
月夜會

曉ゆとも朝ゆとも名候あれど一袖高麗雪具  
時、人うすぬくと水をかけ、よくもと消え  
也。——石をうちて氷合す。——袖を仰きて知るべ  
ゆえ、或庵が一袖あつて地の如ふた。——袖背  
店の大賀が一室あつて入事。半あり母付あるが、  
少く通とけ。——小廻りの御は事と退通を行ひ。  
——秋も初く傷めめんとゆく宿が、——れるの念。  
小念も感へせり

と水汗色えむ面白くぬくはらう。——と具は正しく  
まよきあんぐりの毛アードトモ生す半あり母付の

不化車縁あめり。陽火前度うづよく。——途中に至る  
陳半を不及言  
自と入る事一左未用持す梅を貞ふまとて、雪  
かじとくのへくじうひふあうれ。——休振士へ仰き半  
縁みゆく定ツツ一か金く。——車をさかねばとす  
以半免とあ。——利休と相承の會承を接お

初會

惠。往多

往。往とさう。——りか半 稔ふりへーー名花  
林木めくと。——あを若よ。——もまーと。——舍す  
半めり定ツツ一か金く。——車をさかねばとす  
以半免とあ。——利休と相承の會承を接お

之をうり物たり圓智庵——休居士、日聖厚  
經人送り——經人ふかく宣す事は御免入不生え  
——御免と見行角入と云詮あり  
船に勤弁する——船が傍りて走行のこころふう  
ちきゆめ、車めりを——

往と送り昂列船生やうひ下をもあそびと被る

いふを思ふトヨ

### 雨中之會

己とと會す設けゆくを——と云ひて是雨中用  
夕立じく雨中——不夜と曰、不斜焉爾也因雨

杯酒翁不歸翁等杯と酒半——等有の色——不——  
雨を嫌ふを世人に事と云——かけ小舎不腐とを  
車ぬ湯あり宗尼とお月雨付と水井と門と  
水れ多まつて済り止マリ——ふどうとす行賈  
をあけ不——く行旅——と左儀と出——と引  
舟をも直ひあり雨中も——い客と中をさせも——は直  
小舟を否車のまへかくはかを——水舟をも開つて  
舟行かせ——と車——本福と考へ

### 燭會 風作令

十月朔日を閏櫻<sup>ムツシキ</sup>、二月節と閏櫻半す老  
き室之氣と、の國櫻<sup>ムツシキ</sup>也。若<sup>レ</sup>ノ次陳<sup>ミ</sup>  
時凡西月すもふくじ風<sup>ハラ</sup>斯<sup>ス</sup>トモ吉一四例あり九  
月中旬以後亦同<sup>レ</sup>。但<sup>レ</sup>候<sup>ス</sup>至四季<sup>トモ</sup>半<sup>ハ</sup>也。す  
全<sup>ハ</sup>ノ一例<sup>ハ</sup>那<sup>ハ</sup>えより是<sup>ハ</sup>道興<sup>ハ</sup>故<sup>ハ</sup>季<sup>モ</sup>  
別<sup>ハ</sup>ル。此<sup>ハ</sup>具<sup>ハ</sup>報<sup>エ</sup>不知<sup>シ</sup>に<sup>ハ</sup>室<sup>ハ</sup>氣<sup>ハ</sup>對<sup>ハ</sup>節<sup>モ</sup>也。  
風<sup>ハ</sup>極<sup>シ</sup>すも<sup>ハ</sup>綿<sup>ハ</sup>入<sup>ス</sup>か<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>而<sup>シ</sup>ト<sup>ハ</sup>也。  
是<sup>ハ</sup>一大<sup>ハ</sup>物<sup>ハ</sup>多<sup>ハ</sup>い事<sup>モ</sup>也。

夏涼<sup>ハ</sup>室<sup>ハ</sup>氣<sup>ハ</sup>利休<sup>ハ</sup>教<sup>ス</sup>也。角<sup>ハ</sup>廻<sup>ス</sup>風<sup>ハ</sup>壁<sup>モ</sup>  
室<sup>モ</sup>矣<sup>ハ</sup>。時<sup>モ</sup>室<sup>モ</sup>やうりと室<sup>モ</sup>腰<sup>モ</sup>けふか<sup>ハ</sup>也。

客<sup>モ</sup>室<sup>モ</sup>包<sup>ハ</sup>ふ<sup>シ</sup>よし<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>。

炉<sup>ハ</sup>會<sup>ハ</sup>榻<sup>席</sup>と風<sup>ハ</sup>屏<sup>席</sup>と人得<sup>ハ</sup>格<sup>リ</sup>。是<sup>ハ</sup>嘗<sup>ニ</sup>  
之<sup>モ</sup>第<sup>ニ</sup>平<sup>モ</sup>也。人<sup>ハ</sup>智<sup>ハ</sup>不<sup>セ</sup>也。留<sup>屋</sup>と<sup>ハ</sup>或<sup>ニ</sup>也。論<sup>ハ</sup>  
留<sup>屋</sup>と中<sup>ハ</sup>く包<sup>ハ</sup>む。是<sup>ハ</sup>より食<sup>ハ</sup>汁<sup>モ</sup>菜<sup>モ</sup>許<sup>カ</sup>へ<sup>シ</sup>蓋<sup>モ</sup>  
争<sup>ハ</sup>ふ<sup>シ</sup>。か<sup>ハ</sup>す事<sup>モ</sup>め<sup>ハ</sup>。是<sup>ハ</sup>人<sup>ハ</sup>勤<sup>カ</sup>き<sup>シ</sup>。か<sup>ハ</sup>室<sup>ハ</sup>氣<sup>モ</sup>  
付<sup>カ</sup>す。室<sup>モ</sup>あ<sup>シ</sup>。世<sup>モ</sup>えり<sup>シ</sup>。然<sup>モ</sup>何<sup>シ</sup>角<sup>モ</sup>  
さ<sup>シ</sup>。ふ<sup>シ</sup>や高<sup>モ</sup>物<sup>モ</sup>許<sup>カ</sup>く。勝<sup>モ</sup>う<sup>シ</sup>事<sup>モ</sup>す<sup>シ</sup>。是<sup>ハ</sup>  
火<sup>モ</sup>事<sup>モ</sup>人<sup>モ</sup>用<sup>カ</sup>。今<sup>モ</sup>は<sup>シ</sup>考<sup>カ</sup>れ<sup>ハ</sup>自<sup>由</sup>す<sup>シ</sup>。

炉<sup>モ</sup>中<sup>モ</sup>事<sup>モ</sup>休<sup>ム</sup>南方<sup>モ</sup>。而<sup>シ</sup>幅<sup>モ</sup>中<sup>モ</sup>。之<sup>モ</sup>處<sup>モ</sup>灰

左藏の時よりゆる右藏の所より放灰を今付ふ  
粉多しく毒ガ、振へし生家後物はく渴之切板四  
角圓一板下かく口方れ駄ち浦にたまぬやうふじつ  
りと底盤上ケシル板かする焉が令れ給全と用  
立てて渴れ切板大キ盛ヘ一常瓶少して空氣  
毛水く度よくふり此渴相争ひて空氣流りて板  
餘味亦不及渴全之が中古すと便人  
一人不依り茶をさる。又自生源少くが一と茶  
室中深天小爐ふく茶室中時此渴相争一茶渴具  
时全と目上にさへれんえや獨役さう見能斗り之聲

不得遠いう利渴全を必取候くと能

知念一

太徳院后植屋子ノ風便さう不簡一

風拂玉子

風便乃室所墨子れ取元を知くといが

金ノの左ふくも拂玉子

風便之内ト中利体南坊時代かきあへう  
西石風炉火氣はるいをきこふと歎とき  
すむ中句拂玉子とふと後玉子京氣

人やうの旅り行く左藏才一茶器と持く初

あら山化りや、やうやくの山の  
かへる杯、とくえんにしろとをもじ杯の事  
うるめ、小山が、かくちば上すよの處  
なほ、かくまうろの、みのや、  
まきぬの事、うれやけう能く得心  
く在行山の

風流小行説といふ中あり本解多し筆跡ゆき入巻斗  
かひきとくの中てふるり是待清り物風抱  
之内不取れども明より御まづかと便に使す令を  
かき風といふ度又左へて風吹きやうと風を二三日生

損一失十の如きは勿論  
風炉掃除の際は扇と至る所を拂到  
窓あらゆる火を入れてゐるが未だ限らず  
遠腰那小膏は茶不争お岩杯其事より是れ  
以降大不思議な小火を入れ持ててやうに至り火と  
まゝ勝手の如くめり菴は改めて持て拂く是度  
幅席をす茶話生——多聞の傍は火相と考へ  
くわざ能成も向きて一年とあるもこの前二三か月  
か一月で極口若化ゆ入小火と入骨火  
氣度も滿足するが——中止を内歎義を  
ゆ——其様持ててお達せば良かとさす也——今至

すれど秋涼寺にて見奈倉利休の事とし暑とて  
しきりすれど車一回ひあつて次而者達人へ行持を  
辰巳へ初入先身旦辰火と入涼しきて心あく舍一  
御寺よりもまことに林百石内に小庵浦ノ茶室至る所  
居一折、此舍も有る舍一初入先身舍川ノ小  
茶室ノ時火とさしゆる。休庭士四例もあは  
時より別以次方仕合一

風炉極異之而節古本赤拂ふ吉良とを並ばやう  
而後いはき一車本端ふあり休て車先を冰室  
ひらうと水無月ればひまて有る能う

風炉北辰會主燭木匠よ師傳少く人得合一

極異之今小水行車一法、かく也も座、かくもしな  
次風炉主茶室と水室と一以上とあるとくわ  
ふかむかく車中あらむ一七八月徒歩相島、  
立寄とも未だ未熟此人がうふをかくす方腰りけふ事  
もとくじつ入舍席をも接持え上相付し或  
ととんほの有り雨落お時三二つを合一客室  
も二つを合一居を入車右にまくと腰掛ト  
一筋下居を放倒、大相行處り市内入めれどもく

かづか角——巻迄より度入すべし——かやうに時近杯  
妄用

是事事小極あり殊先真れを補是事根柢にて  
名教店士一臣——くらひ——是事中草庵體  
きこる御ともいま一白はあ地草庵とは云ひて  
陽先真れをもすか——茶乞ふ不化する院さすへ  
炉あ——き日乞ふと飾りふ中板長板等不化すべし  
あは是屋子中央卓常比卓除是板布を乞ふ  
く法奥、れきうちあはふを——あせ入ふと有余  
無す真をあふとされ深乃ら一類ゆく小失ある

又酒鷦四魚と申さるを説略あはく、草庵れがよく用  
於革酒——の金まい持來り當せりまた院草庵と  
文——申ふふれり彼本福不休の欲息道理を極  
きり墨と申せ半——被手と申せ一白は草庵れ花  
少くもたまむ——伊豆初——すめ——柳杯れ半と免  
しと用免キニヤ南方——奉人取革——うた墨と半  
と自由——と五合よりくそう行ふ人をかみなし  
能く勘弁のうへ犯事と申ゆか——得心すべし

第六會

素——すへ茶湯としふをもすか——此山水色お涙拭て

大生より正とれる事無くす次第未開を没  
一車秀吉公入侍時利休泉引大膳守全モ  
魚行一當圓翁傳松原と魚行せり仰いと松  
原と松原を仰てお化す水毎月加茂川  
毛利妙法寺門主日知翁細川忠興孫あひて御  
所と向毛利三平竹久工アヒと祕教<sup>極</sup>と  
毛利の茶人船内作庵浦とは遠い艸山に氣  
小脇於く立寄とよんかく吹小庄浦とすふもす  
ぬうり仰者と不化の祀をかゝる山万水比流も并有り  
令れぬと毛利一二席此の味不えはまく又御代泉休

あく吹即不仰と被是とく不間すべし休南坊毛利

せすとく詫うせすと不化也

院宗四科等有時大集鏡石等隼人有時隼人不  
奪境有時人境あ見石隼人境但奪是と  
被朱火食本音三叶り候隼人境不奪又と  
うを太れし隼人見ひ鳥と以向上度之當世が  
ニシキく近身行すとそと車小机程と制す  
承ふことあすけ多き也

空手不於ら徳是子不接とれ渡矩とたし免之寛の意  
對毛利大半自由自在の小一矩矩不意

少とおのまかう 疾矩あく縄墨去行役すと入る  
人れ不化う 故ト密物坏も時とれう簡とて済半ら  
也とし居士せ法用 一茶氣水さー少す捕折矣等  
之疾矩馬三字不篇不字一毛もく

茶入

かく物を立たへ被器物

茶碗

袋入中二  
分少し同二三

茶入

茶入ノ利

薄茶入

中二三

茶釜

つ入

茶巾

二つ

茶托

中二三

小羽箒

香懷中 之本等品 之傳多

金賓う會

布袋減海篇不於く南坊宗信禪師 一記廿

文既書乃と小字も

木石草木草庵詩奥窟室庵主磨経とく  
前山あつまく山河其經詮法式物 事と山  
乃水氣中勿漏う其主方并山前山とく  
以師傳と宣不不与と云とも此根本經詮  
之秘傳一尺一寸巻一卷一千多方記自古

主へお手本へ不化を以て板をもとより本式  
小ども大しきや大神事一處に於ては水石草木  
草庵をも寄附是法也別一規矩と云ひ一因小  
寺院ノ一毎年安安の様にあだされ利休等  
太過るゝと知り免へ一多んと以ゆるまへ一寢  
相之お終へお相手近へくき西古地も奉をいかで  
けふを以て山窟主を彼窟相之相済へ窟主が  
是磨をへて度へ事あり五日所位と生息  
人代匠をえひひきへ今日比草庵の御物と無  
金と云ひ一會席と喫へ大相と仰ふ相高に

小宿歩へく三脚り入りく雷吹若聲少間相  
もく一舷も奉と丘へく城主窟相せらぬ少尉  
二色と申す一窟相済すれば相ちまへ  
きふ一是と以てへ窟坐しらんしかのふとら  
也相そ對一相立する故相あつて一派すれへ一通  
お相ととして民す御前役小者有渠何をか我  
西うれえ本林四難万鬼相と波へ總見よされ  
高貴へ應れれ元の心よりは浮小倉得し行  
し得る事一不叶車を人哉、相と手くらぬ  
まいゆは豆野川領の茶人といふを一丸を

もさ人様の山千三百駆トぬ、ケリ是不はまのキと  
頬例逆勝江邊と毛牛牛、うと此時をや懶じ  
色——我貴小茶友小文と半文小先人を  
を必ず名高ひて平々からん坐——を亦——半車添  
大旨半身もううと毛肩、毛代今ひらと没け卷末  
小記す。ものうれ

寶山函之

寶山自筆本書校合多相違者也

道桂

朱印  
石下

